釣れ釣れなるままに

１９９７年思い出の釣行記 PART.　３

浮気心が

鹿島釣狂

第７回大会

☆開 催 日	平成９年１１月１６日			
☆開催場所	東静内港～浦河港			
☆入釣場所	越海			
☆潮	干潮	００：２５	２８㎝	
☆釣　果	カジカ	３２０	㎜	３
	ハゴトコ	２６０	㎜	２
	重量	２３１	０ｇ	
☆成　績	合計点数	８１１	点	
	成績	８	位	

１０月３１日に職場の大きな行事が終わった。参加者が４５３名にものばり、釣りにも行かず、家族サービスもなしでの準備等、それまでの苦労を吹き飛ばす大成功であった。１１月３０日にはもう一つ大きな行事を控えているが、今回は参加させていただくことにする。いつものように当日までは仕掛け作りもままならず、エサの買い出しもやっとこさ済ました。

今回の入釣場所候補は

①　元浦川河口～春立入り口

②　春立４区～春立駅前

③　三石越海町大階段前
④　鳧舞崖下
⑤　井寒台
と考えて後はバスの中で先輩たちに開きながら決定することにする。
　バスの一番後で隣に座ったのが千成氏で、最近はネットを使うようになったので釣果がよいとのことである。前回もなかなかよい成廣をおさめ５位入賞を果たしている。

彼の有名な大階段前も

　東静内港で身支度を整え、春立に差しかかる。ギョギョライトの明かりが見えない。誰も降りない。一瞬、私一人が自由に釣り場を占領し、大カジカを次から次へと釣り上げている様子が目に浮かぶ。バスは春立を通過する。盈進でたくさんの仲間が降り立つ。１番とか４番とか８番とか言い合っている。どうも防潮提から突き出たテトラポットの波除けの番号であるらしい。自分の入る場所をそれぞれで決めているらしい。私が入る場所など無さそうだ。鳧舞崖下はあまりよくないらしい。井寒台も１週間前の下見では全く魚がいないとのこと。いかんたい！（使い古された駄栖落で申し訳ない）
　かねてから入りたいと思っていた三石大階段前に差しかかると嵐氏が降りるという。あわてて自分も降りる。彼について行けばまず間違いはないだろう。バスから降り立つと、なるはど、釣り人が三石大階段前の目印としている大きなオンコの木が道路の左脇に堂々と鎮座している。
　大階段前は小さな防波堤がついており、以前の大階段前と比べると大変狭くなってしまったらしい。魚の入りも余りよくないようだ。しかも当日は真夜中にもかかわらず、重機が盛んに海底を掘っており、ガツン、ガツンと大きな音を立てている。

浮気心が

　大階段から右方向に向かう。一番日の舟揚場には誰もいない。嵐氏は３番目でやるという。私は２番目でやることにする。場所の様子を嵐氏に懇切丁寧に教えていただく。
「今は干潮なので、あそこに見える岩場の先端に出てプール状になった所を十時方向に３０メートルぐらいの距離で打ち込むこと。潮が満ちてきたら、今打っている場所をよく覚えておき、防潮提の上に上がって同じところに打ち込むように」
とご指導を賜る。早速岩場の先端に出て様子を伺う。
　そこから左側１００メートルほどの所に昆布の密集した所が見える。
「現在は最干潮なので、海水がなく濡れた昆布原が広がっているだけだが、後１時間もすれば其処には海水が満ちてくることだろう。現在立っている場所は若干高そうなので、ここは１時間後に再度挑戦しよう。」
と得意の浮気心を出し、濡れた昆布の上を滑りながら釣り場を確保する。昆布の際にイカゴロネット仕掛けで３本共打ち込む。すぐに当たりで、カジカの３２㎝が２本上がる。し

めしめと自分の考えの深さにはくそ笑む。しかし、ふと気が付くと嵐さんに教えていただいた所には、他の釣り会の人が入っている。辺りには誰もいないので２本目の舟揚げ場前はわたしの思うままの釣り場だと思って油断したのがいけなかった。しかもそこに入った人はすぐに４８㎝程のカジカを得意そうに（実際見たわけではないが、いかにも）上げている。嵐氏がやってきて「どうした？」と聞く。訳を話すと自分のことのように悔しがる。せっかく懇切丁寧に教えて頂いた嵐氏に申し訳ない気持ちでいっぱいになる。

たかがハゴトコ、されどハゴトコ

間もなく潮が満ちてきてその場にいられなくなる。舟揚げ場に場所を設定し直す。３時頃ようやく３本目のカジカが上がる。途中何度か嵐氏がやってきた。様子を伺いに来るところを見ると彼もあまり芳しくないようである。知らないうちに１本目の舟揚げ場に移動していたり、２本目と３本目の間にでんと構えて居たりで場所替えを頻繁に行っている。わたしも手ぶらであっちにふらふらこっちにふらふらしたつもりだが、私以上に嵐氏は道具をもってうろつき回っている。

小さなハゴトコも釣れて一応５匹そろった。嫁さんのアブラコを釣るために場所を移動しようと道具を片付ける。が、ハゴトコがいない。そのへんに投げておいたものが見当たらない。階段が多少坂になっているのと潮が満ちてきているのとで暴れているうちに海にお帰りになったのであろう。それはいい。しかし三脚に吊り下げておいた海水入りの小さなビニルバケツの中にいるはずの少し大きめのハゴトコ２匹も見当たらない。あわててもう一度ハゴトコを釣るために？？？仕掛けを投げ入れる。すぐにでも釣れるだろうと多寡をくくっていたが釣れないときは釣れないものである。その後は１匹も釣れないままに時間だけが経って行く。

漁師さんがやってきて、今年はあまり大きなものを上げたのを見たことがないという。まだまだ海水が温かいという。昆布も今年はあまりよくなかったと言うことである。これも地球温暖化のせいか。今年はエルニーニョ現象でもあるという。心ない釣り人がやって来て、あたり一面にゴミを巻き散らかして行く。しかも高いお金を出して昆布干し場に敷いた石の上にゴロの油を平気で落として行くと言う。釣り場を汚さないように細心の注意を払う。私たち釣り人にとってはたかが遊びだが漁師の皆さんにとっては死活問題である。

愛用のウェアーも胴長靴もリールも

寒くなってきた。防寒具が今年はあたらない。スキーウェアーを今年の春に釣り用に降ろしたのだが、潮風に吹かれ、手入れも悪くジッパーが腐ってしまった。今まで使っていた防寒具はどれを見ても使えそうもない。仕方がないので下着に何枚も温かいものを着込み上着は夏物を使用したのだ。この夏物のウインドブレーカーの様なジャンパーは２０年も使ってきたものだ。とても気に入っていて、ジッパー部分を修理したりほころびを繕ったりして手放すことができない。

いよいよ寒くなってきた。ここは越海町である。街並みを形成しているので、自動販売機ぐらいあるだろう。ホット缶コーヒーでも仕入れに行こう。少し遠かったので体を暖めるにはほどよい距離であった。防寒着を購入なくては・・・。

また、足がグチョグチョしてきた。胴長靴に穴が開いているのだ。これも私が渓流用に初めて購入したものであるが１０年間は使用している。靴底のフェルトは、擦り減ってなくなってしまったので自分で新しいものに張り替えた。それもほとんど無くなってきた。小さな穴があるのか帰るころには靴下が塩水に浸かっていて足の指先がふやけている。何度も修理してきているのだが靴全体のゴムがひび割れしてきている。これも新しいものに取り替えなくては・・・。

釣り場に戻り戦闘開始だ。すべて遠投していたもののエサを付け替えるべく打ち直そうとリールを巻く。獲物の手ごたえがある。しかし、リールがままならない。５年ほど前のものであるが、ギーコ、ギーコと金切り声をあげている。納竿期はリールを分解して油を差したりして丁寧に手入れしておいたのだが、立ち込みなどで無理したせいであろう塩水に使ったまま何ヶ月も放っておいたものだから少しの抵抗でガクガクとハンドルが揺れ、巻くことがままならない。少し手のいい物にスプールを取り替えたりしながら何とか持ちこたえている。やっぱりハゴトコだ。ほんとに小さなハゴトコだが、リールのお陰で大物の期待をいつも膨らましてくれる。しかし本当に大物がかかった場合これでは途中の根に潜られて仕留めることはできないであろう。リールも新品なものがほしい。

あきらめずに打ち返すことが

あきらめずに何度も何度も打ち返す。どうにかハゴトコが釣れてやっと２魚種５匹がそろった。後１本のアブラコを夢見てさらに何度も打ち返すが締め切り時間が来た。残念だが今年の私の釣りは終わった。後片付けをして越海町バス停に戻る。

まもなく三石町側から前野氏がやってきた。さっぱりであったとのこと。嵐氏もやってきた。なんだか顔がほころんでいる。ズックバックを開けると何と立派なアブラコが入っているではないか。最後に入ったところで仕留めたものらしい。やっぱりあきらめずに打ち返すことが・・・。名人会の金井さんが通りかかる。この人はいつもどころからともなく現れる。いつも海岸線を走っているのだろうか。嵐氏の獲物を見て４５㎝ぐらいはあるなと言う。私はもう少し大きいように思えるのだが・・・。

泉食堂前で審査する。審査の結果嵐氏のアブラコは５０㎝を超えていた。それでもって優勝は１２１５点の嵐氏。準優勝は１１１２点の佐々木（秀）氏。３位に１１０８点の岡氏。身長優勝は４３．２㎝のアブラコを釣った吉井氏。わたしは８１１点で８位入賞となった。

至福のひとときと

泉食堂でソバを食べた。いつもながらここのソバは本当に美味い。皆さん帰りにシシャ

モを買うために鵡川の店に立ち寄るという。私も釣果が芳しくないのでお土産に買って行こうと思う。しかし、美味いソバでおなかが膨れたのと、入賞で少しビールを放み過ぎたせいか帰りのバスではぐっすり眠ってしまった。気が付いたときには岩見沢の人となっていた。普段お世話になっている人たちへのお土産に考えていたシシャモは岩見沢のシシャモとならなかったのである。

あまりよい釣果ではなく体の方も疲れきっていたが、仕事で苛立っていた頭の方はすっきりとなった。わが家に着くと娘が出迎えてくれ釣果も尋ねてくれる。得意そうに釣果を並べている私の写真を振ってくれるのもいつも娘だ。カジカを鍋用に捌いていると刺し身にはできないのかと尋ねてくる。早速、刺し身にしてみる。小さな黒い点々が見える。虫だと困るのでその部分を除いて一切れ口に入れてやる。私の口にはワサビをたっぷりつけた３切れほどをほお張る。カジカの刺し身もなかなか淡泊でいける。女房にカジカ汁をつくってもらったがオレンジの肝は娘の口に、カジカの頭は私の口に、一番美味くない身の部分はいつものように女房の口に納まった。

１９９７年度は大会参加の回数が少なく年間入賞はない。しかし、大会参加の度毎によきアドバイスを送ってくれる釣遵会のメンバーの皆さんにと、いつもながらわたしに至福のひとときを与えてくれる大海原に感謝し、今年度の「釣れ釣れなるままに」を閉じさしていただきます。

②５月１１日　豊浜郵便局　１０９２　２位
④７月２０日　東歌別　　１１１３　４位
⑦１１月１６日　越海　　８１１　８位

３回平均　３０１６÷３＝１００５